

「早く入れなさい」

朝見愛美は、この恥辱の時間から逃れるために、足を肩幅に開いた。

「先生、待ちきれないのね」

教え子の磯川瑠理が笑う。

「もう少し濡れてくださらないと入れにくいわね」

瑠理と仲良しの近田由紀の指が愛美の敏感な箇所に触れてきた。思わず腰を引いてしまう。教え子に女性の一番敏感なところを触られている行為に恥辱感が増してくる。

愛美は、スカートをたくし上げており、パンティは太股まで下げている。そして足を開き、異物の挿入を待っているのだ。3階から4階に上がる階段の踊り場で恥部を露出している。信じられないことだった。教え子の少女たちの言いなりになっていることは、あまりにも屈辱的だ。悔しい感情で胸はいっぱいになり、締め付けられるようにつらい時間だった。

「舐めてください」

瑠理が平然という。

「はい、あーん」

幼い子に口を開けさせるように由紀がおどけた調子で言う。その言い方が愛美の胸に突き刺さる。悔しい思いがさらに膨れあがる。

4階の教室はすべて特別教室で、午前中の授業では使用されない。この階段を上ってくる生徒はほとんどいない。しかし、絶対に他の生徒が上ってこないという保証はない。自分でスカートを腰までめくり上げ、パンティを太股まで下げた姿を見られたらおしまいだ。彼女らは、もしもの時はスカートを素早く下ろせばいいのだと言う。それでも愛美の心中は穏やかではない。3階の廊下から生徒たちの声が聞こえているのだ。すぐそばに多くの生徒たちがいる。そんな状況で、愛美は恥部を晒しているのだ。

由紀が開けた口にローターを入れてきた。無造作な入れ方だ。やがて愛美の唾液で濡れたローターが股間に押しつけられる。気をゆるめると声が漏れそうになる。全長5 c

mの長いローターが埋まっていく。愛美はワギナが押し広げられる感覚に性交時の感覚を呼び起こしてしまう。少女の手によって挿入されているというのに、愛美は声が漏れそうになっている。それを必死でこらえる。

「奥まで入れましょうね」

由紀が埋めたローターを瑠理が細く冷たい指で押し込む。瑠子の子宮口に届くまで深く沈めるのだ。

「こんなことをして何がおもしろいの！」

パンティを引き上げた愛美は、語気を荒げた。抑えきれない感情だった。これまでも愛美は少女たちに抑えきれない感情をぶつけた。しかし、愛美の怒りや哀しみ、懇願はすべて少女たちにとって手中に収めた生贄を弄ぶための演出となった。